

[研究ノート]

ピアノ弾き歌いにおける効果的な指導法について —初学者の学修効率化に向けて—

An Effective Accompaniment Method for Playing Piano and Singing at the Same Time —Towards More Efficient Learning for Beginner University Students—

林 京平

HAYASHI Kyohei

〈抄 録〉

保育士資格や幼稚園教諭免許の取得を目指す学生は、大学へ入学してから初めてピアノを学ぶことも少なくない。筆者は保育者を養成する大学において、5年に亘り、ピアノと弾き歌いの指導に携わってきたが、その過程で幾度となく、初学者の練習上のつまずきや挫折を目の当たりにしてきた。本研究は、筆者がその過程で試みた、効果的な指導方法を紹介する。このとき、短期間での成長を促すための簡易な編曲についても検証する。上記の考察を通じて、学修者のレベルに合わない選曲が、ときに初学者成長の妨げになり得る点を指摘し、本研究の結論としたい。

キーワード：ピアノ、弾き歌い、子どもの歌、童謡、保育士資格、幼稚園教諭免許

Abstract

Many of the students aiming to acquire nursery teacher qualifications and kindergarten teacher licenses learn piano for the first time after entering university. For five years, I have been involved in teaching piano and singing at a university that trains nursery schoolteachers. This study introduces an effective teaching method that the author tried in the process. At this time, we will also examine simple arrangements for promoting growth in a short period of time. Through the above discussion, I would like to conclude this research by pointing out that selection of music that does not match the learner's level can sometimes hinder the growth of beginners.

Keywords: piano, play and sing, children's song, nursery rhyme, nursery teacher qualification, kindergarten teacher license

1. はじめに

保育士の国家試験は、「音楽に関する技術」「造形に関する技術」「言語に関する技術」の中から2科目を選択して受験する（全国保育士養成協議会）。ここでは「音楽に関する技術」を選ばなければ、ピアノの試験を回避することもできてしまう現状がある。換言すれば、仮にピアノが弾けなくても、保育士や幼稚園教諭になれてしまうということである。しかし、保育士や幼稚園教諭を目指す者が保育科を有する大学や短期大学に進学した後、ピアノは必須科目となる。かつて筆者は、こうした環境で教鞭を執っていたが、満足にピアノを弾けず苦しんでいる学生の姿に接してきた。そこで本稿では、このような問題が起こる背景を検証し、教員に求められるスキルについて考察を行う。その上で、大学で初めてピアノを学ぼうとする学生が、現場で必要とされる演奏能力を効率的に学修するための方法を提案する。このとき、とくにピアノ伴奏法に関する問題に意識を置きながら論述を進めてみたい。その過程で、難易度の高い作品を、簡易な伴奏にアレンジする方法にも触れてみたい。

2. 保育項目における「弾き歌い」の重要性

『保育所保育指針』においては、感性と表現に関する保育項目と、音楽や歌が密接に関わっている点が指摘されている。たとえば乳児保育の項目では、「保育士等の歌やリズムに合わせて、体を動かすことを楽しみ、近くで同じ動作をする他の子どもと共鳴し合って楽しさを分かち合うことは、自分の気持ちを他の子どもに伝えようとするこへとつながる経験ともなる」（2018: 123）と述べられている。同書では、1歳以上3歳未満児の保育に関して「音楽やリズムに合わせて体を動かすという経験を通して、子どもは、楽しい気持ちをこうした方法で表現することの喜びを味わう」（同前: 176）と述べ、3歳以上に関する「音楽に親しみ歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう」（同前: 280）と述べている。上記のコメントからも、歌を楽しむことが子どもの発達においても大きな影響を及ぼし、表現や発想の豊かさを育むことが重要視されていることが伺える。

そのため、保育士や幼稚園教諭を目指す者にとって、子どもの歌の「弾き歌い」の伴奏技術は重要な課題となる。なぜなら、彼らが保育士資格や幼稚園教諭免許を取得する上で、ピアノは必須項目であるにも関わらず、大学における僅かな期間で、実践的な演奏スキルを修得しなければならないからである。なお本稿においては「弾き歌い」を、主に子どものための歌、すなわち保育の現場で歌われ、教材として取り上げられている歌唱曲を、ピアノなどの楽器で伴奏しながら自ら歌う行為と定義しておく。

幼児教育科の学生のピアノ経験は、初学者と上級者では大きな差がある。幼少期から専門教育を受けてきた学生は、自主的に練習に取り組んでゆく傾向が見られるが、大学で初めてピアノを習う学生にとっては、それ自体もままならないケースも多い。さらには、幼児教育科の学生はピアノを弾くだけでなく、童謡の「弾き歌い」も求められる。もし伴奏を上手く弾けるようになって、そこに歌が加わった途端に、たちまち演奏が止まってしまう。ここに「弾き歌い」の難しさがある。こうした現状においては、ピアノの練習にもやる気を無くし、悪循環に陥る学生も多い。それでも、卒業後の彼らの幼稚園や保育園への就職を目指して、教員は一人ひとりのレベルに合わせた指導が必要になる。短期大学の2年間、もしくは大学の4年間だけで、初学者を現場で通用するレベルにまで上達させることは、不可能とまでは言えないものの、学生の資質によって大きな困難を伴うことが多い。実際、ピアノの演奏が上手く出来ないことにストレスを感じる学生も多い。この経験を通して、筆者はこれまで指導者として、どのように初学者をサポートすべきかを常に思案してきた。

3. 保育科大学でピアノを学ぶ初学者の現状と問題

3.1 学生のピアノのレベル

かつて筆者が教鞭をとった保育科を持つ大学では、入学試験にピアノの試験が課されていなかった。そのため、大学で初めてピアノを学ぶという学生も多々、見受けられた。白石他では「ピアノ初心者は、確かに増加傾向にあるのであるが、むしろ極端な初心者も増加傾向にあることが問題である」（2014: 83）と指摘されている。そうした学生は、大学での初回のレッスンで自分のレベルを痛感することになる。そのうえ慣れないピアノに加え、さまざまな学生生活の緊張感からか、遅刻や欠席も増え、毎回の課題に十分に取り組めない学生も現れるようになる。しかし、ここで厳しく注意すれば、さらにやる気を削ぐことになるだろう。そのため、とくに初学者の対応には注意する必要がある。

グループ・レッスンでは一人10～15分程度の時間しか割けない。だからと言って、ピアノの初学者だけに時間を多く割り振ることもできない。したがって、いかに短時間で効果的な指導をするかは、常に教員に問われる課題となる。筆者が担当したクラスの授業アンケートには、2～7名程のグループ・レッスンに関して、「時間配分を平等にして欲しい」という意見が寄せられた。グループ・レッスンのデメリットとして、一人ひとりのレッスン時間を十分に取れない点があげられる。その一方で、それぞれ取り組む曲の長さも違うので、レッスン時間にしばしば差が生じてしまうことも否めない。この問題を解決するためには、端的に個人レッスンを充実させれば良いのだが、学生の履修状況や、教室の空き状況、指導者の人数の限界もあり、現実的には難しい。15回の限られたレッスンの中で、毎回の指導の質や的確なアドバイス、そして確実な進捗が求められる。そのため、いかに限られた時間で密度の濃いレッスンができるかが、教員にとっては重要な課題となる。

その一方で、初学者と経験者が同じグループになった場合には、「教え合いや弾き合いが楽しかった」というアンケート回答もあった。これは、グループ・レッスンのメリットといえよう。また「学生の進度やレベルに合わせてレッスンをしてくれた」という書き込みを見た時、やはり他の学生のレッスンの現状もよく見ており、そこでのアドバイスがクラス全員に響くこともあることを実感した。

3.2 学生のピアノ環境とオンライン・レッスン

ピアノの練習は家庭でも取り組んでほしい。しかし学生の中には、家庭にピアノがない者もいた。だからと言って教員の指導でピアノを購入させることも難しい。仮にピアノを所有している学生であっても、夜まで音を出して練習できない者も多い。通常であれば、大学の練習室での練習や、レッスンの合間にピアノに触れる機会を作ったりすることも可能であったが、2020年以降の新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の蔓延のため、実技の授業をオンラインに移行したため、それが全てできなくなった。簡易なキーボードの購入も難しい場合は、苦肉の策で紙鍵盤を作り、それをを用いて練習やZoomでレッスンを行うこともあった。しかしこの方法では当然、学修効率が格段に落ちる。上記のような経済的に練習環境を整えることが難しい学生に対して、筆者も様々な工夫を試みたが、やはり大学の手厚いサポートの充実が望まれる。中野は鍵盤楽器の確保の問題を、アンケートのデータと共に指摘している。それによれば、ピアノを持っている学生は53名中39名で、持っていない学生にメールでやり取りをして購入を促したり貸与したり、別途対応に苦労したと述べている（2021: 138）。

オンライン・レッスンにおいては、ピアノの音質が大きく変化するというデメリットも指摘しておきたい。学生の弾く音が途切れてしまい、音が全く聞こえなくなるケースもあったからだ。この点に限らず、オンライン・レッスンには解決すべき問題が山積しているものの、思わぬメリットもあった。

たとえば、学生の体調が悪い時に、対面のレッスンであれば欠席するところを、オンラインであれば自宅で無理せずレッスンに参加できる。さらには、「画面越しのピアノ」という状況を逆手に取り、合理的な練習方法の発案にも繋がった。さらには、グループ・レッスンでは他の学生もいるため相談しにくい個人的な質問も、オンラインの個人レッスンであれば、学生も比較的、聞きやすい。図らずも取り入れたオンラインではあったが、こうした有効性があったことも強調しておきたい。

4. 保育の現場で教師に求められるスキル

本章では、先行研究を参照しながら、保育の現場で求められるピアノのスキルを考察していきたい。筆者はかねがね、音楽を通して子どもの表現の幅を広げ、感性を豊かにすることが一番大切であると考えてきた。そのため、教員が課題曲をミスなく弾くことに重きを置いてしまう姿勢は、子どもの成長や発達を助けることには、本質的に意味を成さないと思われる。奥も「学生にはピアノの基礎だけでなく、音楽の基礎と音楽教育の基礎を、同時に指導しなければならないのである。間違いを指摘するだけのような、そのようなレッスンであってはならないのである」(2009: 145)と述べている。指導者の中には一音のミスで怒りを露わにし、学生の取り組み自体を否定してしまう教師もいる。これでは学生を萎縮させてしまい、成長の妨げにもなるであろう。

保育科を持つ大学のピアノのレッスンでは、保育士試験のレベルまで上達させることが目的となる。幼稚園や保育所では当然、プロのピアニストのような高い演奏水準が求められる訳ではない。彼らにとっては、鍛錬を重ねた技巧や、聴衆を感動させることを目指す演奏は、本質的な問題ではない。たとえば、田中が実施した現場の園長へのヒアリングでは、「単にピアノを上手に弾くことではなく、弾き歌いの能力が重視される。すなわち、ピアノを弾きながら歌うことができ、幼児に興味を持たせ、子どもたちと一緒に音楽を楽しむことができる能力である」(2018: 231)と指摘されている。また奥は、「幼稚園指導要領が示す領域『表現』に求められるのは、音楽の表現の仕方を指導することではない。子どもの美的経験や美的表現への要求に対し、保育者は様々な音楽の持つ機能を通して、いかにかわり、いかに援助できるかを求めるものである」(2009: 145)と述べている。保育科に在籍する学生の演奏に接していると、上手く弾くことばかりに学生の目が向いてしまい、逆に弾けないことで自分自身を追い込んでしまう傾向が見られる。試験で良い点数を取ることに越したことはないが、それは最終目標ではない。試験はあくまでも、現在の到達点の確認に過ぎない。田中も「多くの学生は、“幼稚園教諭や保育士を目指すならピアノを弾かなければ”という固定概念を持っており、ソナタやソナチネなどの高度な技術を求められる演奏をイメージしてしまい、最初から尻込みしてしまいがちである」(2018: 232)と述べている。この言葉からも、保育科大学の学生の意識の現状が伺える。幼稚園教諭や保育士は、子どもたちと音楽を通して楽しむことが一番であり、その上で必要なスキルは、ピアノの「上手さ」だけではないと筆者は考える。この点を指導者は認識する必要がある。

幼稚園や保育園では、季節によって歌う曲も異なる。そのため、幼稚園教諭や保育士は、臨機応変に、実践可能な曲をできる限り増やしておくことも大切である。近藤他も「求められる基礎的能力は『子供の顔を見ながら弾ける』ピアノ演奏技術と『子どもと一緒に楽しく歌が歌え、手遊び・指遊びをたくさん知って』いることである」(2011: 634-5)と述べている。曲によって子どもの好き嫌いも分かれてくることは想像に難くない。従って、その日の子供たちの表情や気分に合わせて、柔軟に曲目を選択することも必要となってくる。そのためにも、教師が常に弾ける曲目を多く持てることが大切である。それにもかかわらず、本稿第2章で指摘した、学生のピアノの技術に関する問題が立ち上がる。そこで次章では、初学者が躓きにくい効果的な学習方法や、簡易伴奏のアレンジ方法と指遣いについて

での実践に関して考察を行ってみたい。

5. ピアノ初学者に向けた効果的な学習方法—簡易伴奏と指遣い

ピアノを始めた頃の頃は、どの曲が自分に適しているかを、上手く判断ができない学生も多い。そのため、自分が「ただ弾きたい」という感覚に任せて、自由に選曲した作品を練習したものの、上手く弾けずにやる気を無くしてしまう学生も多い。その意味において、初学者が陥りやすい問題の一つとして、選曲の問題を指摘しておきたい。一曲目から弾けない経験をしてしまうと、学生のその後の成長にも悪影響を及ぼす可能性もある。指導者は、学生の現状や弾くときの癖を把握し、学習者に適した選曲の手助けをする必要がある。換言すれば、学生のレベルに応じて、経験者からのアドバイスを伝えることが大切となる。ただこの曲を弾きたい、という学生側の要望だけを優先しないようにすることが重要である。【表1】は、小林美実（1975、1996）で取り上げられている課題曲の中から、とくに初学者が取り組みやすいと思われる曲を、筆者がレッスン用を選択した楽曲の一覧である。

1	雨降り	15	ぞうさん
2	ありさんのおはなし	16	ぞうさんのぼうし
3	うみ	17	チューリップ
4	お馬	18	ちょうちょう
5	おかえりのうた	19	つき
6	おかたづけ	20	てんとうむし
7	おべんとう	21	とんとんとんとんひげじいさん
8	おもいでアルバム	22	ハッピーチルドレン
9	おもちゃのマーチ	23	鳩
10	かたつむり	24	春が来た
11	靴が鳴る	25	ぶんぶんぶん
12	こぎつね	26	まつぼっくり
13	しゃぼんだま	27	やまのおんがくか
14	世界中のこどもたちが	28	ゆき

5.1 和音による簡易伴奏

第2章では学生の学修環境やレッスン時間の問題を指摘したが、5分～15分程度の限られた時間の中でのレッスンでは、指導者も課題曲の全てを見ることは難しい。このとき、限られた時間や環境の中で学生に譜読みをさせる上で、作品の簡略化（とくに伴奏）は有効な手段となる。簡易伴奏により、初学の学生の不安や焦りといった、精神的な負担を軽減できると考える。

【譜例1】《ハッピーチルドレン》作詞：新沢としひこ 作曲：中川ひろたか 編曲：増田裕子

1. そ れ は ふ し ぎ な ま ほ う の ち か ら ほ く と は な す と
2. そ れ は ふ し ぎ な ま ほ う の ち か ら わ た し を み る と

JASRAC 出 2300189-301

【譜例2】《ハッピーチルドレン》コード伴奏（筆者作成）

簡易伴奏では、左手の動きを統一することで、練習時間の短縮にも繋がると考える。最も基本的な方法として、和音（コード）による伴奏がある。【譜例1】は《ハッピーチルドレン》（小林1996: 144）であるが、左手の伴奏が和音を2つに分割している形となっており、初学者のポジション移動に困難が生じることが想定される楽曲である。このとき【譜例2】のように一つの和音にまとめることで、楽譜も簡略化され、各段に弾き易くなると考える。この作品のコード進行はC→Dm→G7→Cのカデンツの繰り返しとなるため、左手の動きも単純化し易い。当然のことながら、指遣いも指導者が最初に指導すべきである。コード伴奏に慣れてきたら、コード譜（メロディーとコードが書かれているだけの楽譜）からも、伴奏付けをすることもできるようになる。さらには、子どもたちの関心・集中度に応じて、和音を分割させたり、アルペッジョでアレンジを加えたりすることもできると考える。手元ばかりを見てピアノを演奏しては、児童に視線を向けることもままならなくなる。そこで、伴奏者の視野をできるだけ自由にするためにも、簡略化したコード伴奏は効果があると考えられる。

5.2 上達に繋がる効果的な指遣いについて

ピアニストにとって指遣いは、弾きやすくもなり、弾きづらくもなる重要な要素である。ましてや初学者にとっては、指遣いは大きな問題となろう。しかし不適切な指遣いのままにしておくと、レッスン時間もままならない学生にとっては、大きな問題になりかねない。そのためにも、なるべく早い段階から、正しい指遣いを教授することは肝要と考える。以下は、筆者の演奏経験に基づきながら、学生に指導を実践している指遣いに関するポイントである。

- ①順次進行の場合は、できるだけ隣同士の指を遣う。
- ②鍵盤の距離感に感覚的に慣れる。
- ③同音で同じ指遣いの連続にも慣れる。
- ④同音連打では、鍵盤の同じ場所を弾かず、ときには奥や手前にずらしながら弾く。
- ⑤左手の分散和音は、和音の指遣いを意識しながら演奏する。
- ⑥両手ともに親指と小指を弾く時に、手首が下がらないように注意する。
- ⑦譜読みをする前には、できるだけ指導者や上級者に指遣いを教えてもらう。

【譜例3】の《こぎつね》(小林1975: 141)の後半部分の右手は、隣の指遣いを工夫することで大変弾きやすくなる例である。5→4→3→2→1のように、順番通りの指遣いで演奏することは理想的である。ただし【譜例3】の4と3の指は、それぞれ3回連続して弾くことになるため、初学者にとっては難しい動きとなる。多くの学生は、同じ指で弾くことを嫌がる傾向にある。それでもこの指遣いは、他の多くの曲でも有効ではあるため、指を変えずこの動きには慣れるべきと考える。この指遣いでは、鍵盤の手前から奥に少しだけスライドしながら弾くことで滑らかに演奏することができる。子どもの歌の伴奏は、一曲一曲が全くの別物という訳でもなく、ある種の共通点も見られる。そのため、ときにはある曲で試した方法を、また次の曲に活用することも可能となる。

【譜例3】《こぎつね》作詞：勝承夫 作曲：ドイツ曲



JASRAC 出 2300189-301

6. まとめと課題

以上の考察を踏まえて、まとめに入る。本研究では、ピアノ伴奏法に関する問題に意識を置きながら考察を進めてきた。たとえば、演奏レベルの高い楽譜を使用したために、一曲に多くの時間を費やしてしまい、落ち込んでしまう初学者の姿を指摘した。この悪循環に陥ると、年間を通して取り組める曲が減少する。先に指摘したように、保育の現場では臨機応変な「弾き歌い」が求められるだけでなく、ピアノを弾きながら子どもたちにも注意を向けなければならない。こうした現状に対して、本稿では指導者による選曲のサポートに加え、簡易楽譜の作成の提案を行った。今回は紙面の都合から、僅かな例に留まったが、簡易楽譜の導入により、学修者のレベルに応じた楽譜を効果的に使用し、学修の効率化を図ることができると考える。ピアノの「弾き歌い」に関しては、無理難題な技術を学生に押し付けることはあってはならない。そのためにも、学生のレベルに応じた指導と成長段階に合わせたピアノ伴奏のアレンジの方法をこれからも研究していきたい。さらには、より難易度の高い名曲作品（ショパンやシューマンなど）を簡易化する実例も積み重ねていくつもりである。

ピアノの学修には多くの時間が必要である。一朝一夕には成果を実感できないため、教員は長い期間、辛抱強く学修者に向き合う必要がある。このとき、「この学生にはできない」「弾けないと」決めつけない姿勢が重要である。学生の中には、毎日の練習が実を結び、ある日驚くような成長を見せる者もいる。筆者は何度もそのような場面に遭遇してきた。このとき、学生たちと柔軟にコミュニケーションを取りながら、ピアノの指導をしていくことの必要性を実感するのである。そのためにも、学生のメンタル面、とくにモチベーションの維持は大切な要因となる。学生が日々の練習の中で無理なく上達できるよう、本稿での提案を実施しながら、これからも温かいサポートを心がけたいと考える。

参考文献

- 奥千恵子 2009 「保育者養成と演奏技法—保育指導としてのピアノ奏法—」『四天王寺大学紀要』第48号、137-154頁。
厚生労働省 2018 『保育所保育指針解説』 フレーベル館。
小林美実 1996 『続 こどものうた200』 チャイルド本社。

- 小林美実 1975 『こどものうた200』 チャイルド本社。
- 近藤久美、吉弘淳一 2001 「現場の求める保育士の音楽的資質について——滋賀県内の保育所へのアンケート調査から——」 『日本保育学会大会研究論文集』 第54巻、634-635頁。
- 白石景一、中村浩美 2014 「保育者養成校における音楽指導法の研究 第8報——主に『ピアノ個人レッスンサポート講座』実施について——」 『長崎女子短期大学紀要』 第38号、82-87頁。
- 田中節夫 2018 「幼児教育学科におけるピアノ教育の方法試論」 『山陽論叢』 第25巻、231-243頁。
- 中野圭子 2021 「オンラインレッスンに関する一考察—「器楽Ⅱ」の授業での取り組みについて—」 『園田学園女子大学論文集』 第55号、135-147頁。
- 森田千智 2020 「子どもの歌の弾き歌いにおけるピアノ伴奏法」 『東海学園大学教育研究紀要』 第4巻、81-89頁。
- 吉村淳子、芝崎美和 2015 「保育者養成におけるピアノ指導について—学生の自己効力感に着目して—」 『新見公立大学紀要』 第36巻、59-66頁。
- 全国保育士養成協議会 『令和4年受験申請の手引き』 閲覧日2022年12月1日。
<https://www.hoyokyo.or.jp/exam/guidance/>